

総指揮官と私の事情

◀ クイーラ

ケイトに絡む、お色気満載の女性。どうやら過去にアリオスと何かあったらしいが……

▲ エリーザ

儂げな見た目の、名家の令嬢。アリオスのお見合いの相手。

▲ アルピラ

気の強い、おませな貴族令嬢。わずか8歳にして恋に悩む。

▲ エディアルド

ケイトが働く食堂に来るお客さん。上品な身なりの超美形。

▲ レスター

アリオスを慕う副官。童顔の子犬属性で、かなりの苦勞性。

▲ アリオス・ランバートン

23歳という若さで、騎士団の総指揮官を務める。超美形だが、冷静沈着でかなり無表情。

▲ 恵都(ケイト)

突然、異世界にトリップした20歳の女の子。アリオスに衣食住の面倒をみてもらうが、ニートのままではいけないと、自立を決意する。

1 「脱・異世界ニート」を目標に

ここは街の一角にある、フォンセ食堂。

昼時は騎士達で賑わいを見せ、夜は仕事帰りの労働者達でごった返す、いつも大忙しのこの食堂は、安いしボリューム満点。そしてアットホームで居心地のいいお店だと評判だ。

気のいいおかみさんと、そのおかみさんの尻に敷かれてる優しいおじさんが切り盛りしているのだが、そこに最近、一人従業員が増えた。

それが、この私。名前は恵都、二十歳。

テーブルの後片付けをしていると、隣で食事をしている騎士達の会話が自然と耳に入ってくる。

「なあ、聞いた？ 最近、総指揮官殿が直々に指導しているらしいぜ」

「あの人は、言葉で教えるより実践派だからな。そして何より妥協を許さない性格だから、相手が倒れるまでやるぜ。指導の場では、本当に鬼だよな」

「しかし最近、総指揮官殿、いつにも増して威圧感漂うっていうか……」

「わかる。なんか機嫌悪そうで近寄りたくない雰囲気だよな……」

すみません、騎士さん達。

その総指揮官殿というお人が、最近機嫌がよろしくないのは、もしかしたらアレ。そう――

私が彼のもとを飛び出したせいかもしれない。

こうなった理由は、話せば長い。

元々地球にある日本という国で生まれ育ち、ちょうど短大を卒業した私は、この春から社会人になるはずだった。

それなのに、ある日道を歩いていたら、いきなり足下にできた黒いブラックホールに引きずり込まれ――たどり着いた先は、なんと異世界でした。

突然、映画で見るような西洋風の大きなお屋敷の広い庭にポツンといて、右も左もわからず途方にくれたっけ。

そんな動揺している私の前に現れたのは、一人の見目麗しい男の人だった。

涙を流している私のことを、探るような目つきで警戒しながらも、いつの間にか無表情で立っていたのだ。

その男性というのが、先程の騎士たちの会話に出てきた、騎士団の総指揮官殿。

総指揮官と聞くと、どんなマッチョでヒゲボーンのおじさんかと想像してしまう人が多いだろう。しかし実際は遅い体つきで、淡い茶色の髪に、切れ長の薄い青の瞳を持つ美青年だった。ちょっと――いや、かなり無表情なのが気になるけれど、慣れてしまえばなんてことはない。ちなみに、

年齢は二十三歳だ。

その若さで総指揮官？ と最初は驚いたが、実力では右に出る者はいないらしく、頭も相当きれいならしい。

だが、部下である騎士達から聞く総指揮官殿と同一人物とは思えないくらい、私には優しかった。レディファーストなお国柄のせいか、女性には優しいのだろう。異世界二トの私を保護してくれる面倒を見てくれたのだから。

混乱して泣いている私を見て何を言うのでもなく、ただ側で泣き止むのを待っていてくれた。世話をしているからといって、特に何かを強要するでもなく、自由にさせてくれる。

衣食住全てが、まさに至れり尽くせりのお姫様扱い。

そうして、数カ月の間お世話になっていただけで、やがて私は自分の生き方に疑問を持ち始めてきたのだ。いつまでも甘えていてはいけなのでは？ と。

だいたいこの世界にも慣れてきたし、元々順応力がある方だと思うので、何とかやっていけるだろう。

小さい頃から親の仕事の都合で引っ越しを繰り返していて、もはや何回転校したのか自分でも覚えていないけど、どこへ行ってもつつがなく生活できていたし。

最初は異世界でもやっていけるのかなと思っただけど、言葉も通じず、食べ物も美味しくない。生活していく上での不便さは、さほど感じなかった。

ようは慣れよ、慣れ！

元の世界でも、ちようど社会人になって自立するところだったのだ。

ちなみに私の両親は割と放任主義で、私の短大卒業と同時に海外でボランティア活動をやるのかなんとか言って、旅立って行った。だからしばらく家に帰らなくても大丈夫だろう。

そう色々考えたある日、総指揮官殿に勇気を出して宣言してみた。
「そろそろ自立を考えています」

——だけど、口の端を少し上げた彼に『却下』と瞬殺された。

私が『この人、過保護すぎる』と気が付いた瞬間だった。

もう大人なのに、屋敷から一人で出るのは危険と言われ、お出かけできるのは総指揮官殿の休みの日のみ。街に買い物に行ったら、どの店に行くのも一緒。私はそんな子供ではないはずだ。

毎日綺麗な服を着て、三度のご飯だけが楽しみな生活に、これじゃあいけないと思った。

朝、総指揮官殿と朝食をとり、仕事に行くのを見送る。

昼間は暇なので、本を読んだり、庭を散歩したり、昼寝したり、昼寝したり……うん、ダメ人間だね！

総指揮官殿との夕食の席で、今日がどれだけ暇で時間を持て余したかを語る。情に訴える作戦ともいう。ただし訴えても、彼は口の端を軽く上げるだけ。

そうして、こんな生活×一八〇日ぐらい過ごしている。

異世界トリップした身で、本来なら路頭に迷うところ、総指揮官殿には衣食住の面倒を見てもらい、かなり感謝はしている。恩人といってもいい。

だけど、いつまでもこのままお世話になりっぱなしという訳にもいかない。もっと外の世界を感じて、無芸大食な私なりに一人でも生活できるようにならなくてはいけないのだ。総指揮官殿の厚意に甘えていちゃいけないと、今さらながら気付いた。

総指揮官殿は、騎士団の取りまとめをしているだけあって、常に冷静沈着。

余計な事は一切言わないし、私の話も聞いているのか、いないのか……反応は薄い。その表情からは、感情があまり読み取れない。

たまに口を開いたと思ったら何故か固い言葉を使うので、『私の事、警戒している？』と、最初は思った。でも、これは彼にとつては普通の言葉遣いらしい。

そう思ったら、なんだか吹っ切れた。

最初の頃は、『話しすぎるとうるさいかしら？』と気にして必要以上に話さなかつたけれど、もう自分の思うままに突き進む事にしたのだ。

だって、会話のない食事は、毎日お通夜みたいな暗さなんだもの。

それに、私が黙つていようが、ずっとしゃべつていようが、総指揮官殿の表情に変化はほぼなし。ただ、今のところ総指揮官殿は耳を傾けてくれているように見える。その証拠に、たまに口の端を上げて微々たる反応を示している気がする。

いや、反応が薄いから、たとえ嫌がっているのだとしても、私は気付かないと思うけどね。

私は、どうに会話のキャッチボールというものをあきらめているから大丈夫。反応が薄くても気にしない。むしろ大きい独り言と認識して欲しい。だって、しゃべらないとストレスがたまるもの。

『女の人は話す事でストレスを発散させる』と、昔友達が言っていたけど、それは当たっていると思う。

しかし、そんな総指揮官殿だから、つい心配してしまう。総指揮官殿は迷惑でもはつきり言えないんじゃないのか……って。本心はどう思っているのだろう。

『異世界から来て、泣いていたから面倒を見てやったが、いつまでこの屋敷にいるのだろう』

『毎日毎日、飽きもせずにべらべらとやかましい』

『屋敷にいるなら、生活費入れる』

とか、いろいろ思っけていても、口に出せないだけとか……

それに総指揮官殿だって、二十三歳というお年頃。外見だって、文句のつけようがない端麗な容姿なので、女にもてない訳がない。

あえて言うなら、いつも冷静すぎて何を考えているのかよくわからないところがタマに瑕きずかな。きつと、私みたいな凡人には想像もつかないような頭のいいコトを考えているんだろうけど。

屋敷に招きたい女性もいるかもしれないのに、こんな正体不明の女が居座っていたら、上手くいくものもいかなんじゃないのか？ もしかして、私ってば、恩人の恋路を邪魔してる？

そんなことを考え出したのもあって、総指揮官殿が公務で三日間留守にした隙に一大決心をした。置き手紙に感謝の気持ちと、落ち着いたら連絡する旨むねを記し、『脱・異世界二一ト』を目標に、外の世界に飛び出したのだ。

以前、総指揮官殿が街を案内してくれた際に見つけた、一軒の食堂。そこで住み込みの店員を募

集する張り紙を見つけて、ずっと機会を狙っていたのだ。

ありがたいことに、この食堂のおじさんとおかみさんは喜んで私を雇ってくれた。

気のいい人達で、素人同然の私に一から優しく教えてくれた。二週間経った今では『接客業は笑顔をやさず』をモットーに、仕事に励む日々を送っている。ちなみに食堂の二階のひと部屋を借りて、そこに寝泊まりしている。

しかしこの食堂は、騎士達の憩いの場所だったらしく、お昼時には騎士の方達が大勢集まってくる。最初はすぐに見つかっちゃうかもしれないと思っただけれど、今のところは大丈夫。『灯台下もと暗し』とはこのことだわ。

「最近、妙に殺気だっているし、稽古けいこをつけてもらっている連中も、体がもたないよな……」

騎士の一人が深いため息をついている。

しかし、総指揮官殿、話に聞き限りお元氣そうでなによりだ。その反面、部下の人達は何だか憂鬱うつそうですが。何はともあれ、私は陰ながら総指揮官殿の健康を祈ろうと思う。

そんなこんなで、昼時の忙しい時間はめまぐるしく過ぎていく。

ああ、労働って、自立って素晴らしい！ いつか、堂々と総指揮官殿に会いに行ける日も、そう遠くはないはずだ。私は充実感を味わいながら、忙しく動き回った。

ふーふふふーん♪

昼の忙しさも一段落つき、そろそろまかないの時間かしら？ と期待に胸を弾ませて鼻歌を歌っ

ていた。

食堂の扉が開いて来客を告げるベルが鳴ったので、私は条件反射で声を出す。

「いらっしや……………いつ!？」

食堂に入ってきたお客の顔を見て、思わず声が裏返ってしまった。ついでに顔も引きつってしまっ。

言っておきませんが、こんな事初めてだから。いつもはちゃんと笑顔で挨拶あいさつできているからっ！

言われたお客も私の裏返った声を聞いて、固まっている。

……………いや、違う。私の顔を見て固まっていると言った方が正しいだろう。

やがて我に返ったお客は、靴音を立てながら足早に近寄って来た。

「やっと思つた！ こんな所で何を!!」

いきなり私の両肩を掴んだ相手は、総指揮官殿の側近であるレスターだった。

「何って、見ればわかると思いますが？ 仕事中です！ いらっしやいませ！」

年齢の割に童顔なレスターは驚きをあらわにして言った。

「総指揮官殿が必死であなたを探しておられるというのに！」

「……………は？」

総指揮官殿が私を探している？ それは、何故？ あの手紙を読んでいないの？

「とにかく無事で良かった！ 部下達がこの食堂に最近、『可愛らしい黒髪の店員が入った』と噂していたので、もしやと思い、足に向けてみて正解でした！」

レスターは、興奮して顔を赤らめたまま、一方的にまくしたてる。

「とにかく一度、総指揮官殿のもとにお戻り下さい！ このままでは、騎士団に支障……………いえ総指揮官殿のお体に支障が出てしまいます！」

レスターの様子とは逆に、私は冷静に尋ねる。

「ちよつと質問」

「はい？」

「私がここにいる事は、まだ総指揮官殿には、ばれていない？」

「もちろんです！ 知っていたら、ご自分ですぐさま駆けつけるでしょう」

そうか、了解しました。興奮しているレスターに向かつて、私は呑のん気に答える。

「あー、私が総指揮官殿のところに戻る理由はないと思うのですが……………」

この答えを聞いてレスターの目が点になった。

「何をおっしゃいますか！」

「だって……………」

こっちの世界に来て、一時的に保護してくれるだけならわかるけど、もう半年だよ？

これ以上私の世話をすることで、総指揮官殿に変な噂でもたつたらどうするの？ それこそ将来に何か支障が出るかもしれないじゃない。

——それに、彼の側にいる理由がない。

恩人である彼の邪魔にはなりたくないと思ったのだ。

勝手に抜け出したのは悪いと思うけど、そうでもしなきゃ出してくれなかったんだもの。だけど、落ち着いたら挨拶あいさつに行つて、ちゃんと自立した私の姿を見せて安心してもらおうつもりだったのだ。やはり顔を見てお礼を言わなければいけないとも思っていたし。ただ、今はまだその時ではない。

「まず一度お戻りを!!」

「ダメです」

「そこを何とか!」

「嫌です」

渋る私と、レスターとの間で押し問答が繰り返り広げられる。

食堂のおかみさんとおじさんが、心配そうな顔をしてそのやり取りを見ていた。

* * *

「そうか……彼女が……」

「はい! はいいい!! 本当に、本当に! 昨日までここに居たのです!」

側近であるレスターは、涙目になりながら必死に弁解している。

今日の早朝のこと。レスターからの一報を聞いた自分は高鳴る胸を抑え、すぐさま街の一角にある食堂に駆けつけた。彼女の姿を探すが見当たらず、食堂を営んでいる夫婦に尋ねると、すでに彼女は昨日付けで店を辞めたとのこと。

自分でも驚くぐらいに落胆する。期待した分だけ余計に……だ。

人知れずため息を漏らし、眉間に皺しわが深く刻まれる。

しかし、ここで働いていたのか――

この食堂は、騎士達の噂で聞いた事がある。値段の割に量もあり、味もなかなかのものだ、と。

しかし、こんなに近場にいたのなら、もっと早くに見つけられたかもしれないのに。そう思うと、悔やんでも悔やみきれない。

古いけれど、掃除の行き届いた清潔な店内を見回す。木で出来た店内は素朴な造り。窓のカーテン、テーブルに並べられたランチョンマットなどは、全て手作りであろう。家庭の温かみを感じられる食堂だ。

ここで彼女は、何人もの客にあの屈託のない笑顔を振りまいていたのだろうか。

しばらく店内を隅々まで眺めていたが、その間もレスターの弁解は続く。

「本当に昨日はこの食堂で働いていたのです!」

「……そうか」

「はいっ! 黒い髪を一つに束ねて、白いエプロンをして自分に『いらっしやいませ』と言ったのです! 確かにここにいたのです!」

「……………」

思わず目を細めると、先程まで興奮して赤かったレスターの顔色は、一瞬にして青くなった。まるで『しまった』とでもいうように。

頭の中で、レスターから聞いた彼女の様子を想像する。

白い肌にも、長いまつげ、キラキラ輝く大きな黒い瞳。くるくる変わる表情に、笑うとえくぼの出来る右頬。

気転が利き、少し早い口調で次から次へと言葉を紡ぎ出す、あの小さく赤い唇。

そんな彼女が、いくら客とはいえ、他の男と話をしていたかと思うと、心中穏やかではいられない。何事にも動じない——よく人からそう評されているが、それは偽りだったと自覚する。

何故、彼女が自分のもとから急にいなくなったのか、彼女が去ってからは自問自答の日々だ。

彼女といる毎朝の朝食は、明るい一日の始まりを意味していた。

朝は苦手なのか、まだ半分眠りから覚めていないような顔をして、いつもテーブルにつく。

そして自分が仕事で屋敷から出る際は、必ず見送ってくれた。見送られるたびにこう思ったものだ。

——今日も業務を終えたら早く帰ってこよう、と。

夕食では、一日の行動を面白おかしく報告してくれる。

『暇だったので、昼寝をしすぎて夜は眠れそうにありません』

『暇だったので、庭の木に登ってみたら降りられなくなって、そこで数時間過ごしました』

『暇だったので、図書館で借りた本を読んでいたら、いつの間にか寝てしまいました』

笑顔で自分に話してくれる彼女を、いつしか愛しく思い始めていた。

その声も、話すしぐさも可愛らしくて、毎日くるくる変わる表情を飽きることなく眺める。一日

の疲れも忘れるほどだ。その間、頬がゆるみ、口の端は上がりっぱなしで、始終しまりのない顔をしていたという自覚がある。

本来、自分は総指揮官という立場から、あまり感情を表に出さない。

感情をさらけ出しては、部下達が動揺する。必要とされるのは冷静な判断、的確な指示、指

導者たる統率力。時には『冷静沈着な鬼の総指揮官』と揶揄されるほどだ。

もしや、そんな立場にあるにもかかわらずだらしのない自分に呆れ果てて、屋敷を出たのだろうか。彼女に、気の利いた言葉の一つでもかけてやれば良かったのだろうか、自分は彼女が話している姿を見つめるのが好きだったのだ。

周りにいる貴族の娘達は大人しく、極端に口数が少ない。口下手な自分とでは、会話に花が咲くことはなかった。それだから、なおさら彼女のおしゃべりが新鮮に感じられたのだろう。

三日間——

公務で遠方に赴いていたあの三日間を、どれだけ長く感じていたか、誰も理解できない。

はやる気持ちを抑え、帰宅したところ、残されていたのは一通の手紙。

そうして、自分に残されたのは喪失感と自問自答の日々だった。

自分のなにか悪かったのか。失礼な態度をとったのだろうか。無神経な行動で彼女を傷つけたのだろうか。毎日同じことを考えているが、未だに答えは出ない。

「……帰るぞ、レスター」

「はっ！ はは」

「帰ったら今日の稽古は俺がつけよう」

「はっ……！ はい！」

彼女がいけないこの場所に長居は無用だ、と踵を返すと、レスターも同様に後に続く。

このみつももないほど気落ちした顔を引き締めるために今出来るのは、稽古だけだ。剣を一心不乱に振れば、この心のざわめきもまぎれるだろう。——そう信じてい。

結果、剣を握っている間は心を無にすることができ、彼女の事を考えずにすんだ。しかし、剣を握る手を休めると、再び心の中を支配するのは彼女だ。

レスターは、激しい稽古で意識を飛ばしてしまい、仰向けになって床に転がっている。その姿を見て、自分も稽古で意識を飛ばせば少しは楽になるのだろうか、と、本気で考えた。

* * *

あの日、食堂にやって来たレスターと私の会話を聞いていた食堂のおかみさんは、何か勘違いをしたらしく、彼をしつこい私のファンと認識した。

「いや、おかみさん。それ……ちよ……違——」

慌てて訂正しようとする私を、おかみさんは大きな声で遮った。

「いいんだよ！ あんたは、あの男から逃げて来たんだろ？ まったく、しつこい男は最悪だね！ あんたは顔も性格も可愛いから、男どもに狙われやすいんだろうけど、女の子なんだから気をつけないと！」

そう言っ、おかみさんは取り付く島もないほど怒ってくれた。

「じゃあ、あの男があきらめるまで、うちの食堂じゃなくて、隣街にある姉の食堂に手伝いにおいき！」

事情を一から説明しようと思ったが、勘違いしたおかみさんの勢いは止まらない。まさに口を挟む隙がないとはこのことだ。

「さあさあ、善は急げだよ！ 今日中に、荷物を持って姉のところに移動しな。私が一緒に行つて話をつけてやるから！」

いや、だから違うって！ まいったなあ……

事情を説明しようにも、熱く心配してくれるおかみさんを見ると、なんだか言い出しにくい。おかみさんは困った顔した私を見て、にっこり微笑んだ。

「またあのしつこい男が来たら、あんたは辞めたって言つてやるよ！」

……まあ、いいか。

レスターには悪いけど、せつかなのでおかみさんの厚意を受ける事にしよう。流れに身を任せると心に決め、荷物をバッグにつめて、隣街へ出発だ。

ごめん、レスター。ストーリー認定されちゃったわ。

しかしあの時、レスターは『総指揮官殿が探している』って言っていた。それがちよつと気にかかると、もしかして手紙一枚だけで済ませた私に怒っていると……？ やつぱり、お別れの挨拶は本人に直接するべきだったかな。

と、私は総指揮官殿と一緒にいた日々を思い返してみた。

彼は自分の事などベラベラとしゃべらないし、余計なおしゃべりもしない。もちろん、会話のキャッチボールなどない。こつちが一方的にボールを投げつけているような感じだった。

最初の方はいろいろ質問していたが、返ってくる返事はいつも必要最低限。きつと総指揮官殿も私のアホさ加減に呆れていたに違いない。

そう、総指揮官殿の反応は薄いのだ。そりゃもう、減塩スープみたい。あるかないかくらいのリアクションばかりだったので、きつと総指揮官殿は右から左へと流していたと思う。

けど、そんな総指揮官殿について一つ気になっている事がある。

それは、彼はとても眠りが浅いらしく、あまり寝付きもよくない人だという事だ。毎日、深夜遅くまで部屋の明かりがついていて、朝は日の出と共に起きるのだとメイドさんたちに聞いた。

いつも睡眠不足だなんて、健康に悪いだろうに……

そう思って冗談交じりで、

「子守歌でも歌いましょうか？」

なんて言ったら、何故か真っ直ぐに見つめられて手を握られた。

何故、ここで手……？

疑問に思いつつも、私はしばらくおしゃべりをやめなかった。そうしたら総指揮官殿が珍しく眠そうになって、切れ長の瞳が少し閉じたのだ。

そこで、おや？ と思った私そのまま休むように勧めたら、総指揮官殿はソファに移動して横

になった。

私は睡眠の邪魔をしちゃ悪いと思いい手を離そうとしたが、どんなに力を入れても総指揮官殿の手は離れない。

……しばらくここに居ろ、ってことかしら。

勝手にそう解釈した私は、総指揮官殿に手を握られたまま、じっとしている事にした。

やがて総指揮官殿は、安心したような無防備な顔で眠りについた。その寝顔を見ると、日頃は無表情な顔も、無邪気な子供みたいに思えてきて可愛い。

それから、毎晩夕食後、ソファで手を握られるのが日課になった。

私はその間おしゃべりを続ける。

最初はうるさいと眠れないだろうと気を使って口を閉じていたのだが、総指揮官殿はじつと私を見つめて無言の圧力をかけてきた。『ああ、しゃべれってことね』と勝手に解釈して、私はまたおしゃべりを再開することになったのだ。

しかし、おしゃべりをしているほうが眠れるなんて、つくづく総指揮官殿はわからない。

……今でもちゃんと眠れているのだろうか？ ふと気になった。

* * *

彼女が屋敷を出てから一カ月。

時間がある時には街に行き、それとなく探して歩き、時には人に尋ねてみたり。

けれども総指揮官という立場上、業務をおろそかには出来ない。そんな自分の立場をはがゆく感じながらも毎日を通していた。

久々の休日だった今日も街を歩いてみたが、何の手がかりも得られずに夕方になって屋敷に帰る。そして自室に籠もり、一人考える。何度思い返してみても、彼女はここにはいない。

冷静で無表情と言われ慣れた自分は、接しにくい人間だと思われることが多い。会話もよく途絶えるのだが、彼女はそれでも笑いながら話しかけてくる。自分の目を見て話す人物、ましてや女性などは稀まれで、最初は驚いたものだ。

『総指揮官殿』

彼女に呼ばれると、緩む頬を抑え、冷静さを保とうと必死になる自分がいる。

あの日、彼女から子守歌の申し出があった時、驚きで心臓が跳ねた。

赤く小さい唇から紡がれる声を聞いていたら、不意に愛いとしさが込み上げてきて、勇気を振り絞った自分は、その白く小さな手をそっと握った。

男の手とは違う、柔らかな肌に細い指。力加減が微妙にわからなくて、どのくらい力を入れていいのか困惑してしまうくらいだ。

彼女が驚いた顔をしたので、振り払われるのを覚悟したが、黙って手を握らせていてくれた。

同時に彼女が自分に向けた笑顔を見て、心臓が音を立てた。

自分の心臓の音が聞こえるなど、こんな経験は初めてだった。

彼女の手に触れ、その声を聞きながら眠りに入る時間に癒いやされる。子守歌のように耳に入ってく

る彼女の優しい声と、小さいけれど手に感じる温かなぬくもり。この手を一生守り、離れたくはないと感じたのに――

だけど彼女は出て行ってしまった。

彼女は、本当は嫌だったのかもしれない。凶やうず々しく触れてくる自分に嫌悪を感じていたのだらうか。

それならば、この屋敷を飛び出したのも納得がいく。

思わず険しい顔つきになっていた時、勢いよく扉がノックされた。

「……入れ」

考えにふけていたところを邪魔されて、少々機嫌が悪くなる。

しかし、扉を開けて部屋に入って来た人物に驚き、思考が停止した。

その人物とは、たった今まで自分を悩ませていた彼女だったのだ。

愛らしい唇に、大きく見開いた瞳。元氣そうに微笑んで自分を見ている。

これは夢か幻まぼろしかと、自分はしばらく動けないでいた。

一カ月ぶりを見る彼女はまったく変わっていない。白い肌の上気した頬。その全てが、自分の視線を奪う。

「お久しぶりです、総指揮官殿」

彼女が自分に話しかけている。これは夢じゃない。突然の出来事に喜びが込み上げ、言葉すら出ない。



「その節は、大変お世話になりました」

彼女は礼儀正しく、深々と頭を下げる。自分は動く事も出来ずに、彼女の行動を見つめていた。そんな自分をたいして気にした風もなく、彼女は続ける。

「あのですね……」

そう言っ、彼女は持っていた紙袋を開ける。そこから淡い桃色の柔らかそうな物体を両手で取り出し、自分に差し出した。

「やっと新しい生活にも慣れてきたので、改めてご挨拶にきました。それと、今までお世話になつたお礼です」

この贈り物を黙って見つめていた自分に、彼女は嬉しそうに言う。

「これは抱き枕です！」

その物体が枕だという事を認識するのに時間がかかった。

「しかもムーファの形なんです！」

確かにこの国にはムーファという動物がいる。彼らは夢の国の住人と揶揄されるほど、一日の大半を寝て過ごす。それと安眠をかけているのだろうか、この枕は。

「何故ムーファかといいますと、動物の癒し効果を期待したいからです！」

誇らしそうに鼻の穴を膨らませつつ、興奮ぎみに彼女は続ける。

「この枕には、安眠を誘うポプリが入っています。これでぐっすり眠れますよ！」

「……」

「あととは心地よい眠りを誘う香油と、ハーブティール……」

紙袋の中をあさる彼女を見つめるうちに、自分はある事に気付いた。

もしや彼女は日々睡眠の足りない自分を心配し、何か手立てはないかと思案した挙句、屋敷を飛び出して行ったのではないか。

そうして自分のために、一カ月もかけて探してくれたのかもしれない。この安眠を誘う枕や様々な道具を――

だが、安眠のためと言うならば、彼女こそが自分にとって安眠へとつながる存在だ。

彼女は枕を両手で差し出したまま、微動だにしない自分の様子を不思議そうに見つめている。首をかしげると、その黒い髪が肩からすべり落ちた。

そんな些細なしぐさや表情の全てが愛しくてたまらなくなり、胸の奥が苦しくなる。

「自分に、安眠を――」

それをくれるのは、目の前の彼女しかいないのだ。

愛しい気持ちを抑えきれずに、思わず枕を抱えていた彼女ごと抱きしめる。

自分のために屋敷を抜け出し、慣れない労働をしてまで賃金を稼ぎ、贈り物を探してくれた。

そして今、ここに戻って来てくれた。

彼女の優しさに触れ、自分は騎士として――いや一人の男として、彼女を一生かけて守ろうと心に誓う。

抱きしめた彼女は、驚きに目を見開いていた。

* * *

総指揮官殿に抱きしめられた日から、数日が過ぎた。

私は一人、椅子に座り頬杖をついて、この屋敷に戻ってきた時の事について思い返していた。

あの日、初お給料を手に入れて、喜びをかみしめながら買い物をしていたら、えらく可愛らしいムーファの枕を見つけた。それを総指揮官殿へのお礼の品物として購入し、届けたら、いたく感謝され……たのかどうかは反応が薄くてわからなかったが、急に枕に抱きついてきたので、きつと喜んでいたはずだ。私をついでに抱きしめてしまうぐらい。

実を言うと、細く見えても意外に逞しい体つきを感じて、ドキドキしてしまった。

枕を渡した後「じゃあ」と言っただけで帰ろうとした私の手を掴み、そのままじっと見つめてきた総指揮官殿。

「あの、そろそろ……」

そう言った私の手をさらに力強く握り、無言の圧力を発する。

その後、この屋敷から帰してもらえなくなったのも、また事実だ。――何故？

朝は共に屋敷を出て、私を食堂に送ってから、総指揮官殿はご自分の業務へと向かう。

お昼過ぎにふらりと現れ、食堂で黙々と食べていく。今では朝昼晩と、総指揮官殿の顔を見ない日はない。その代わり騎士団の若い人達はまったくもって、やって来なくなった。

帰りは食堂まで迎えに来てくれて、屋敷まで一緒に帰る。その後はいつもの夕食をとる。

以前と違うのは、私のおしゃべりの内容が『今日も暇だった』という変わり映えのしない内容ではなくなったこと。

食堂のおかみさん夫婦や、お客さんのお話、その日の仕事の内容とかだ。まあ、相変わらず総指揮官殿の反応が減塩スープなのは変わっていないけれど。

ただ、以前よりは口の端を上げることが多くなった……気がする。それも、笑っているのか、アホな私を憐れんでいるのか、意図は掴めないけれど……まあ、彼が楽しければそれでいいや。

今夜も彼は、私が贈った枕を頭に敷きながら私の手を握り、私のおしゃべりを子守歌代わりに眠るのだろう。

そうして総指揮官殿の無防備な寝顔を見ながら、また今夜も思うのだ。

やっぱり総指揮官殿の思考回路はわからない、と。

しかし、この寝顔を見ていると、ずっと見ていたい気持ちにもなってくるから不思議だ。

とりあえず『脱・異世界ニート』の目標はクリアした。

自立の点ではまだだけど、そう焦ることもないのかなあと、思い始めた。何より心配性の総指揮官殿の無言の圧力が痛いし。

そして『またお世話になります!!』と甘えることに決めた私だった。

2 総指揮官殿と私の文通

総指揮官殿が、公務で隣国へ出掛けた。本日から一カ月ぐらい戻ってこないらしい。

やつほーい！

……とまでは思わないけど、何をしようかちよっとワクワクしてしまふ。

食堂のおかみさんに頼んで、しばらく泊めてもらおうかなあ。その方が仕事に行きやすいし。

最初は住み込みだったんだからいいよね！

今では、送迎付きの通いですが……何故こうなったんだらう？

それは総指揮官殿がとっても過保護だからだ。まったく私のことをいくつだと思っているんだらう。まるで小さい子供を相手にしているのかのようだ。

だから、一人歩きもすぐ心配されるのだ。こころ辺の治安はとってもいいのに！

そんな訳で、総指揮官殿がいない間は、街に一人で買い物に行ったりしたい。

でもって、美味しいスイーツでも探してみようかな！ あとは可愛い雑貨も欲しいなあ〜！

いや、決して総指揮官殿の留守が楽しみな訳ではないのよ。そうよ、楽しみではないのよ。もごもご……

と、自分自身に言い聞かせるも、計画を練っているとやはり楽しくなってきたりするのだった。

そんなある日、総指揮官殿の部下のレスターが、総指揮官殿からの手紙を届けてくれた。こつちの世界に来てから、人から手紙をもらうなんて初めてなので嬉しい。わくわくしながら、のりでべつとり留めてある封筒を開けて中を見る。

『隣国カルパールは由緒正しき大国であり、鉄鋼などの産物も豊富で、その歴史は長く、大変興味深いものがある。我が国とも長きにわたり友好関係を築いている。今回の公務の目的はお互いの騎士団の力の向上を図ることだ。今朝カルパールの、広大さで有名なグルゴニーの丘に着き、かの国の騎士団との交流を円滑に行うため、自国の騎士達の陣営の配置を思案し——』

……開けて読んだ瞬間、わくわくした自分がアホだったと思い知る。

これは、私に一体どうしろというのだろう。しかも丁寧な字で便箋にびっちり三枚も綴られているが、もしや騎士団の記録でもつけるという事なのだろうか。

それとも、私を騎士団に勧誘しているつもりなのか、あの総指揮官殿は。体力気力共に無理だ。理解に苦しむ手紙をもらい、どうしたものかと途方に暮れる。

「レスター……」

「はい！」

「この手紙が国への報告書ではないですよ？ まさかとは思うけど、間違っていないですか？」

「いえ、報告書は先に届けてきました！ 報告書は一枚ですから」

国より、私への手紙の方が長いのか！

総指揮官殿は、これを私にどうしろと——！

この手紙を急いで持ってきたレスターから、何かを期待するようなオーラを感じるが、私はその瞳を真っ直ぐに見つめ返せない。

「レスター、わざわざありがとうございます」

「とんでもありません。それでお返事はどういたしましたでしょうか！」

「……ちよつと時間がないので、今は保留でお願いします」

「そうですか……」

レスターの落ち込み具合を見て申し訳なく思う。

だけど返事と言われても、何をどう書けというのか私にはわからない。

鉄鋼の産物が豊富だなんてまあステキ。グルゴニーの丘？ ピクニックへ行きたいわ。……などと書けばいいのだろうか。

私はしばらく、頭を悩ませた。

それから五日後。

またレスターが屋敷にやって来た。私に手渡したのは総指揮官殿からの報告書……いや、一応手紙なのか？ これは。

すぐさま確認したら、今度ため息の出るような内容だった。

しかも便箋五枚に増えるし。新手の嫌がらせなのかしら。それとも本気で騎士団にお誘いなの

かしら。いつもの事だが、総指揮官殿の行動は理解に苦しむ。

「……レスター」

再び期待に満ちた目で見つめてくるレスターに、申し訳ないけど今回の返事も保留と伝える。レスターは悲壯感を漂わせ、公務先に帰って行った。その日半日ほど、私は頭を悩ませた。十日後。

またまたレスターがやって来た。もう何も言わなくてもわかる。前回よりも分厚い封筒を手渡され、自然に涙目になる私が出た。

「……レスター」

「はい！」

「今日も——」

保留です、と伝えようとしたところ、レスターがいつも以上に強い目で訴えてきた。涙目になっている気がする。よほど返事を持って帰れと圧力でもかけられているのだろうか、そんなレスターに少し同情してしまう。それが失敗だった。

「……明日、お仕事がお休みなので、返事は明日書きます……」

つい、言ってしまった。私のバカ！

レスターは喜んで五日後に来ると言って帰って行った。

私のタイムリミットはあと五日。さあどうする？ 内容は？ 分量は？

一日中、私は頭を悩ませた。

* * *

本日から、友好国である隣国カルパールまでの公務が急遽決まった。

公務なので渋る訳にもいかず、部下達を引き連れて目的地へと向かう。

カルパールへと向かう道中、考える事はただ一つ。

彼女は今、何をしているのだろうか。今も元気に働いているのだろうか。本来なら、この時間は彼女の働く食堂で昼食をとっていたはずだ。突然だったので、挨拶もせずに出てきた自分を彼女は責めるだろうか。

そうだ、良い案が浮かんだ。五日毎に、自国に公務の進捗具合を書き記した報告書を提出しなければならぬ。それを部下に託し、ついでに彼女の様子を見てくるように言付けた。そして報告書と共に、彼女への手紙を部下に渡す。

彼女はどんな顔をして読んでくれるだろうか。

彼女に手紙を渡し始めてから十五日後。

「総指揮官殿！ お返事です！ 預かってまいりました！」

目を輝かせた部下のレスターが、嬉しそうに息を切らせて自分のもとへと駆け寄る。

「総指揮官殿のお手紙、大変喜んでいました！」

「そうか」

「ええ！ 感動のあまり、最後は涙ぐんでいましたから！」

レスターと別れた後に手紙の封を開けると、彼女の丸い字が便箋びんせから飛び出してくる。心が穏やかになる時間。

手紙の内容に特に変わったことは書かれていなかった。どうやら彼女は元気そうだと安心し、口の端が自然に上がる。

自分も最初はどんな内容を書けばいいのか悩み、とりあえず近況報告になっていた。返事を期待して手紙を書いていた訳ではなかったが、彼女の事を考えるとつい筆が進んでしまったのだ。

しかし、こうやって返事をもらえるところは予想外で、それだけに感激もひとしおだ。胸に何かが込み上げてくる。文字を指でなぞりながら、これからも手紙を送り続けようと自分の中で誓いを立てた。

* * *

総指揮官殿から手紙を受け取りはじめて二十日後。

「今日も総指揮官殿からのお手紙を、預かって参りました！」

「げ」

つい心の声から出てしまった私は、慌てて口を押さえる。レスターは一瞬不思議そうな顔をしたが、聞こえていなかったみたいでホッとした。

レスターから受け取る封筒がそのたびに重みを増していくのは、気のせいではないはずだ。

「……一つ、聞いてもいいですか？」

「はい！」

「総指揮官殿は、いつお帰りになるのでしょうか……？」

なんだか、このままでは文通友達になりそうなので、いつそ帰って来て欲しい。私にはあの手紙の返事を書くのは荷が重すぎる。

私の質問を聞いたレスターは瞳を輝かせていた。

それから五日後。いつもの総指揮官殿定期便をレスターから受け取り、封を開けて手紙に目を通す。

しかも今回は、私の出した手紙の誤字脱字までご丁寧に赤ペンで指摘されていた。何これ、どこ通信教育。

手紙の中の総指揮官殿は相変わらずだった。という事はお元気なのだろう。淡々と公務の様子を語っているが、文章レベルが高度なので、辞書を片手に持つても残念ながら七割程しか解読できない。

まあ、この手紙も総指揮官殿らしいといえれば総指揮官殿らしい。真面目な人柄がにじみ出ているし、私を気遣っていることだけは伝わってきた。一言もそんな事は書いていなかったけれども、何となく感じたのだ。

「ああ、総指揮官殿……早く帰ってこないかな……」

ペンを片手に便箋とにらみ合う私は、返事に悩みながら、心からそう願った。

総指揮官殿が公務から、ついに帰ってくるらしい。

長かった……本当に長かった……！！

あの手紙の長さはマジで半端ない！このままいつたら、どこまで長くなったのか。想像するだけで恐ろしい。

きっと総指揮官殿がいない間に、自堕落な生活を送りそうな私に活を入れていたのかもしれない。しかし、私はここで重要な事に気付いた。

総指揮官殿の不在中にやろうと思っていた計画の半分もこなしていない、という現実を。

休みの日に一人でスイーツを探しに行くとか、お買い物に行くとか、そんな計画を全てパーにした総指揮官殿からの通信教育的手紙。あの返事に頭を悩ませる毎日は、勉強していたも同然だった。だから、私はここに誓う！

今日のお休みは、今話題の『ハニーズ・ビー』というスイーツ専門店に行くぞ！

なんでも、そこのお店の名物『ハニーフラン』というお菓子は、ワツフルのような形で外はカリカリ、中はしっとり柔らかな生地で、巷で大人気らしい。噂を聞いた時から、私も食べてみたいと思っていたのだ。

甘いお菓子は私の幸福の源、笑顔のタネ、そして肥満への第一歩。……けど、食べちゃうもんね。総指揮官殿は何故かとても過保護なので、私が一人で出歩くことにあまり良い顔をしない。だ

から、行くなら今のうち。鬼の居ぬ間になんとやら！とは昔の人はよく言ったものだ。いや、別に総指揮官殿を鬼と思っている訳ではないが、あわわわわ。

ハニーフランがあまりにも食べたくて、総指揮官殿の通信教育のお返事にも熱く語ったほどだ。

昔から、食べ物には尋常じゃない熱意を燃やしてしまう。『その熱意を他の事に費やせばいいのに』と、周囲の人間によく言われたが、自分でもそう思う。

思い立ったら吉日で、私は急いで出かける準備をし、張り切って一人、屋敷を飛び出したのだ。

そうしてたどり着いた『ハニーズ・ビー』は大盛況だった。

温かみのある赤いレンガ造りのお店に入った瞬間、甘い香りに包まれる。

店内はわりと広めで、イートインできるスペースもあったので、私は店内で食べることにした。だって、こんな美味しそうな食べ物、すぐ味わいたいじゃない？ ねえ？

飲み物と一緒に、憧れのハニーフランを購入して、わくわくしながら空いている席を探す。

二人がけのテーブルを見つけると、そこに腰をかけて一息つく。さあ食べようと思って口を開けた時、店の入口のベルが鳴り響いた。

何気なく入口の方を向いた私は、そこにいるはずのない人物を見つけ、我が目を疑った。

甘い香りのする店内にまぎれ込んだその人物は、明らかに異彩を放っていた。

切れ長の青い瞳を鋭く輝かせ、店内の様子をうかがっている。甘い香りの漂う店内の雰囲気とは真逆の空気を身にまとうのは、総指揮官殿だった。

なんているんだああ！

私はしばらく開けた口を閉めるのも忘れて彼を見つめていた。だけど、いつまでもこうしているわけにはいかない。そう思っただけから立ち上がり、総指揮官殿に声をかけることにした。

何だか、買い食いがばれてしまった小学生のような気分になったけれど、べつ、別に悪い事なんてしてないし？ 正々堂々と声をかけたわ。

「おっ……おかえりなさい、総指揮官殿」

正々堂々と強がりつつ、噛んでしまった自分が憎い。

私が声をかけると、総指揮官殿は片眉を上げた。たいして驚かなかった様子を見ると、店内に入ってきた時点で私の存在に気付いていたのだろう。さすが総指揮官と呼ばれる立場にいるだけあって、抜かりのない観察力だ。

思わぬ店での遭遇に驚いたが、立ち話も何なので、総指揮官殿に自分の席の場所を教え、『よろしければご一緒に……』と、声をかけた。

しばらくすると、総指揮官殿が飲み物とハニーフランを手に、私の向かいの席に座った。

総指揮官殿はまさかハニーフランを食べたいがためにここまで来たの？ 私の手紙に触発されて？

総指揮官殿は、甘い物なんて食べなさそうだが、人は見かけによらない。総指揮官殿甘党説に、共通の趣味を見つけたみたいで嬉しく感じる。

しかも隣国から帰ってくるなり一人で真っ直ぐこのお店に来るなんて、かなりの通とみた！

私はにやけながら、購入したばかりのハニーフランを口に入れる。

その瞬間、口の中に甘さが広がった。

「美味しい!! 外はサクサクして中はふわふわで柔らかくて、しつこくない甘さ！」

ハニーフランの味は私の想像をはるかに超えていて、ほっぺたが落ちそうなくらいだ。

「しかし本当に美味しいですね。何個でも食べられそう。是非お持ち帰りしなければ！」

私は一人で笑ったり、しゃべったり、食べたりした。総指揮官殿は、いつものように無口で無表情だ。

だけど、そんなの慣れっこなので、私は一人で話を続ける。

「そういえば、アデルの家で先月産まれた子猫を、見に行ってきました」

アデルとは、総指揮官殿のお屋敷に勤めているメイドさんだ。私達は年も近くて仲良しなので、休日でもよく会っている。

「その子猫が、もう小さくて可愛くて！ お母さん猫の側でぐっすり眠っている姿なんて、見ているこっちがとろけそうなくらいで、何時間でも見ていられます」

アデルの家の子猫がどんなに小さくて可愛らしいかについて一通り熱弁をふるった後、前々から疑問に思っていた事をふと思い出し、総指揮官殿に尋ねてみる。

「そういえば、総指揮官殿のご両親は？」

「……」

……そりゃねえ、ご両親が「いる」ってのはわかっているさ。

総指揮官殿だって、木の股から生まれたとか、コウノトリが運んで来たとか、桃の中に入って川から流れてきた訳ではないでしょうに。

私が聞きたいのは、そんな事ではなくて、『ご両親は健在で？』とか、『どちらにお住まいで？』ということだ。

そこから会話に花が咲くかとも思ったけど、やはり無理だった。だけど、まあいいや。いつものことだし、今は味わうことに専念しよう。

* * *

隣国へと公務中、彼女から届いた手紙のやり取りは、慣れない土地で肉体的にも精神的にも疲れていた自分の大きな癒しになった。

夜になると何度読み返したことが。そして公務中は、話がスムーズに進行するようにとお守り代わりに胸ポケットへとしまっていた。

顔を見ないと不安なのだが、それでも彼女とこうやって手紙という手段で繋がるという新たな発見も出来た。

それはそうと、最近の彼女の手紙には気になる一文があった。

『ハニーズ・ビーで売られているハニーフランを食べたいです』

読んだ瞬間、これは、そのハニーフランを手土産として持ち帰って来て欲しいという彼女の願いだと思った。

ただならぬ使命感を感じ、公務を終えると大至急で報告書をまとめて提出し、その足で店に向かったのだ。店の場所は偶然にも甘党であるレスターが把握していた。

そこで嬉しい誤算が起きた。彼女が一足先に店に来ていたのだ。

土産として渡した時の喜ぶ顔が見られないのは少し残念だったが、それよりも彼女に会えた喜びの方が大きかった。

正直、甘い物は匂いからして苦手なのだが、彼女のためなら我慢できる。

目の前で美味しそうに食べている彼女に、ハニーフランをそつと差し出す。

「え？ いいんですか？」

自分がうなずくと、彼女は瞳を輝かせながら、嬉しそうに手を伸ばした。

* * *

お店を出た後、私は総指揮官殿と一緒に屋敷まで帰った。それ以降、食後のデザートはハニーフランが出てくる。最初の頃は喜んだけれど……

ごめんなさい！

いくら総指揮官殿の好物とはいえ、私は正直、もうお腹いっぱいです。だって毎日なんですもの！ うえつぶ。

どんなに美味しくても毎日食べていると拷問に感じてきます。しかも朝晩二回。

なんだか、こうも甘いものが続くと、たまにしょっぱいお煎餅とか食べたくなるのは私だけでは

ないはずだ。

こんなことを考えるのは、わがままで自分でも思う。私がこれを美味いと言ったので、こうやって買ってきてくれているのかもしれないし。

となると、これは私の喜ぶ顔が見たいため……なのかしら？

やはり総指揮官殿はすごく優しい人なのだ。ただその優しさが見えにくく、表現の仕方が不器用なだけで。いつも冷静沈着、整った顔は無表情だけど、心の中で何を考えているのだろう。本当はどんな人なのかしら。

もっと、総指揮官殿の事を知りたいな——そんな風に思ってしまった。

それからしばらくしてのこと。

アデルの家で産まれた子猫のうちの一匹が私のもとにやってきた！

総指揮官殿が、無表情かつ無言で子猫の首根っこを捕まえながら、私に差し出してきたのだ。どうやら私に内緒でアデルからもらってきてくれたらしい。

しかし、総指揮官殿、そんな物を扱うような手つきで……

子猫、びっくりしているから！ 生ものだから！ もっと優しく！

しかし、総指揮官殿にぶらさげられたまま固まっている子猫とか……かつ、可愛すぎる。嬉しさのあまり、ぎゅゅと抱きしめる。

「名前は『チビ』なんてどうかな？」

私に抱かれている子猫に向かって話しかけると、横から鋭い一言が聞こえた。

「——そのまますぎる」

……そういうツッコミを入れる時は口を開くのですね、総指揮官殿。

しかし、連日のハニーフランといい、子猫といい、総指揮官殿つてば私に甘すぎるんじゃないのかしら？

子猫をもらって来てから一週間がたった。

総指揮官殿は、真っ直ぐ背筋を伸ばして机に向かい、黙々と書類に記入している。私はその近く
の床に座り込み、スウィートラブリーな白い子猫を愛でていた。

全身を撫でてやると気持ちよさそうにゴロゴロ喉をならしながらも、私の手にじゃれついてくる。
まだ子猫なので、力加減を知らずに本気でじゃれてくるので地味に痛い。

私の手は小さい引っかけキズだらけ。けど、やめない。だって可愛いんだもの。ピンク色の愛くるしい肉球を思わず口に入れたくなる。

欲求を抑える事が出来ずに、思わず子猫の足を口に入れていたら、いつの間にか総指揮官殿の顔
がこつちを向いていた。あ、やばい。見られた。

「そ、そういえば、この猫の名前はどっしりしましょうか？」

総指揮官殿に、慌てて尋ねる。そうなのだ。まだ大事な名前をつけていないのだ。

……肉球を口に入れていたのを誤魔化す作戦とも言うが。

総指揮官殿は、手を止めて宙を見つめた後、力強い瞳で私を真つ直ぐに見つめると、「クロアドリアナ・デアロンダ・ティーアロードIIアウパンドスラード・オーデアルドラクダル」

と、ひと息で言った。
長っ！

なんですか、その長さ。

私が小学生の時、授業で『じゅげむじゅげむごうのすりきれ……』と、暗記したことがあるけれど、さすがにこの長さは無理だわ。

「そ、その名前の意味は……？」

名前の長さはともかく、その名前に込められた意味って結構重大だと思う。名前は一生ものだし、大切なことでしょう。

総指揮官殿は静かに口を開いた。

「――英雄」

「英雄？」

「三百年程前に、我が国を救った英雄の名で、まだ小競り合いの多かった隣国諸国との戦闘では、彼の通った後は草木の一本も残らず、目を合わせた者は恐怖のあまり狂い、全てを灰と化すと囁かれた程の騎士であり、ひとにらみで敵部隊を壊滅させるほど天才的な力を持つ反面、味方には慈悲深く……」

何、ソレ！ 怖っえええええ!! 血の匂い、プンプンですがな！

床に寝転がって、私の足に可愛くじゃれついてくる白い子猫に、血にまみれた凶暴な英雄と同じ名前をどうしてつけられようか。いや、できない。

聞かなきゃよかった……。そんな後悔の波が押し寄せる。

だけど、私は知っている。日頃、無関心なようである、総指揮官殿はちゃんと子猫を可愛がっているということ。

先日、部屋にいと、子猫の鳴く声が聞こえた。きつとお腹が空いているのだろうと思って、鳴き声の聞こえる方に向かうと、総指揮官殿の足下にまとわりついていた。

そのまま柱の陰から『総指揮官殿はどうするんだろう？』と緊張しながら見守ってみた。

足下の子猫をしばらく無言で見つめていた総指揮官殿はどこかへ消え、やがて子猫用のミルクが入ったお皿を手に戻ってきた。

そしてそのミルクを、総指揮官殿自らの手で子猫にあげていたのだ。

あまりの珍しい光景に、思わず噴き出しそうになった。だって、にこりともせず子猫をガシガシ撫でていたんですもの。ちょっと力加減がおかしいとは思ったけど、微笑ましい様子に胸の中が温かくなったっけ。

だから、あの長い名前は、総指揮官殿なりの子猫に対する愛情だと思う。……多分。

彼女が猫に名前をつけたいと言う。

自分は考えた末に、名誉ある名を提案してみた。この名を授ければ、どんな困難にもめげず、逞しく生きていけるはずだ。

しかし、どうやら彼女もすでに名を考えていたようだった。

「えっと、この猫は白くて毛がふわふわと柔らかくて、とっても可愛らしいから思いついたのです
が……」

彼女の意見も聞きたいと思い、自分は耳を傾ける。

「私のいた世界のある物の名前です。それも子猫と同じく、白くてふわふわで、見ているだけで気分が楽しくなってくるのです。私、小さい頃からそれが大好きで」

彼女は少し照れながらも、自分の意見を堂々と述べる。

彼女が大好きだと言う物に興味がわき、その名を尋ねてみる。

「わたあめです」

わたあめか。

実物を見た事はないが、彼女の説明から察すると、とても人気がある物なのだろう。彼女の案通り命名しようと思い、顔を上げると――

「とっても甘くて美味しい食べ物です！」

「……」

側で猫がニャーと不服そうに鳴いた。よって、この命名の件は、しばらく自分が預かろうと決めた。

しかし、彼女はすぐ子猫を可愛がっている。手を傷つけられようと遊び続け、食事を用意して世話を焼いている。決して声を荒らげることなく、しつづけている様子から、彼女は本当に面倒見がいいとわかる。

たとえ小さくても、一つの命を最後まで責任をもって面倒をみようとする彼女の姿勢に、好感が持てる。自分も、子猫のため素晴らしい名前をつけてやろうと心に誓った。

3 スイーツの彼との出会い

食堂のお昼は忙しい。そりゃ、稼ぎ時だもの。

私も働き始めの頃は、お皿を落したり、コップを割ってしまったりもしたけれど、最近では割と慣れてきたと思う。

食堂のおじさんとおかみさんの作るご飯は、美味しいのに安くてボリュームもあるから大人気だ。美味しいご飯を食べていると、それだけで機嫌も良くなって笑顔になるし、何だか幸せを感じるよね。

私は食べている人達のそういう顔を見るのが、結構好きだったりする。そんな忙しい昼時が過ぎた頃、私はおかみさんの作ってくれた遅めのまかない昼食をとっていた。美味しい料理を味わっていると、食堂の扉が開き、来客を告げるベルが店内に鳴り響く。

「いらつしやいませ」

食堂に入ってきたのは、若い男の人だった。

この食堂に通つてくるお客さん達とは違って身なりや雰囲気は上品で、最初『お店を間違えたのかな?』とさえ思つたほどだ。

皺のないパリッとしたシャツに黒いパンツ、それに革のブーツを履いている。首元で巻かれたスカーフは知的さを感じさせる。上着はシンプルだけど細かい刺繍が入っていて、それを上品に着こなしていた。

『わ……。格好がいい人だわ』

その男の人は、食堂に入つてくると、まず食堂全体をぐるりと見回して、あちこち観察し始めた。茶色のサラサラした髪を揺らし、薄い青色の大きい瞳を輝かせている。年の頃は二十代半ばぐらいだろうか。

席に案内しようと声をかけてみたが、私の声など耳に入っていない様子だ。

まいったなあ……。下手すりゃ、私の存在すら認識していないのかも。

部屋の隅々まで観察しているお客様の前で、存在を認識してもらえらるまで辛抱強く待つ。

しかし、ここまで、この食堂を観察するのは何故だろう。

もしや同業者で、ライブル店潜入とか?

まあ、どことなく気品漂うお客様にそれは無い、と自分で否定したけれど。

しばらくすると、男の人の視線が店内から、ゆっくりと私に移った。

やっと認識してもらえたと安心して、私はお客様に声をかけた。

「いらつしやいませ」

「……」

笑顔で案内しようとするも、お客様は私の顔を見たまま動かない。

今度は食堂から私へと観察対象が変わったのだろうか。

興味深そうな視線に、私はどうしていいのかわからず立ちつくしてしまふ。

「……ああ、失礼!」

お客様が我に返り、微笑みながら返事をしてくれたのでホッとした。

席に案内したものの、彼はまだ食堂を見回していた。いったい何がそんなに珍しいのだろうか。私にも、やたらと視線を向けている気がするけど……気のせいだよ。だって初対面だし。

お水とメニューを持って行くと、そのお客様は優しく微笑みながら受け取った。

そして瞳を細めて優しさをにじませた低い声で私に質問してきた。

「この店のお薦めを教えてくださいかな?」

「はい、今日は、森のきのこがたっぷり入ったスープです。あとは今朝とれたてのジムニの魚をムニエルにして、ホワイトソースのソースで召し上がっていただく料理もお薦めです」

ジムニの魚は今が旬らしく、脂がのっついてプリプリだ。そこにおじさん特製のソースをかける
と、まさに絶品になる。

「じゃあ、それにしよう」

「はい、かしこまりました」

お客様は長い足を組み、ふわりと優しく微笑んだ。

もしかして偉い身分の方がお忍びでいらしたのかしら？

その可能性にドキドキしながらオーダーをおじさんに伝え、やがて出来上がった料理をテーブル
に置いた。

「ありがとうございます」

「ごゆっくりどうぞ」

お客様に声をかけると、私もまかない料理を食べ終えてしまおうと食堂の隅の席に戻った。

しばらくすると、先程のお客様に呼ばれる。

何だろう、もしかしてお口に合わなかったのかな？

テーブルに近付くと、お皿は全て空になっていた。よかった、ひと安心だ。

するとお客様は綺麗に整った顔に、穏やかな笑みを浮かべて言った。

「美味しかったよ」

「ありがとうございます」

私は自分が褒められたかのように嬉しくなる。

「それで、次は食後のデザートを頼みたいのだけど、これもお勧めはある？」

またもや聞いてくるお客様の言葉で、私の頭の中は一気にデザートのオンパレード。

今日のデザートには、完熟とれたて果物で作ったゼリーもあったし、パナツトの実をつぶしてヤ
デーミルクとあえてホイップ状にしたパナツトクリームのみースもあったなあ。その中でも私のお
薦めは……

「パイですね！」

今日食堂に来た時、ちょうどおかみさんがパイを焼いていて、香ばしい匂いが店内に充満してい
たのだ。あの匂いをかいで、食べたくなならない人がどこにしようか。甘い物好きの私には、たまた
らない。

クリームチーズの酸味とパナツトのジャムの素晴らしいハーモニーを想像するだけで、よだれが
出る。サクサクの生地はおかみさんの自信作。絶妙な甘さで、私はこれが大好きだ。

私の力説に、お客様はクスリと笑う。

「じゃあ、それを二つ」

「二つですか？」

「そう、よろしくね」

お客様は、二つも食べるなんて、よほど甘い物が好きらしい。けれど、その気持ちわかるぞ、私
だって甘い物は大好きなもの。

お客様にどこか同じものを感じながら、パイを二つ準備した。

「お待ちせしました、パナットパイです」
「お皿を二つ、お客様の前に置くと、お客様は『ありがとう』と言った後、嬉しそうに笑った。その笑顔が素敵で、少しドキッとする。

お客様は、パイの入った皿を自分の向かいの席に一つ置くと、
「これは、君の分」

と言つて、私に席に座つて食べるように促した。

「え……？」

呆氣にとられていた私と、にこにこ笑うお客様。

デザートを二つ頼んだのつて、こういう意味だったのかと、鈍い頭でやっと理解する。

「いえ！ いけません」

「何故？」

「だって……そんな……」

仕事中だし、見ず知らずの人にごちそうになるわけには……

けれど、はつきりと言えなくて口ごもつてしまう。ああ、日本人のサガ。

お客様は、そんな私の様子を見て困つたように苦笑してから、そつとささやく。

「男一人で甘いものを食べるのが恥ずかしくて……ね。だから協力して欲しいんだよ」

そんな美麗な顔で、首を少しかしげながら見つめられたら、何だか照れて顔が赤くなつてしまう。どうしたものかと考えながらも、パイとおお客様の顔を交互に見て、私の心が揺らぐ。

困つた……でも仕事中だし……けど、お客様の頼みだし。それに……

パイ、美味しそうだよ、パイ！

「美味しい？」

お客様は、にこにこ笑みを浮かべながら、パイを食べる私を見ている。

先程、どうしようか迷つておかみさんにするような視線を送ったら、『食べちゃいな』というゴーサインを受け取つた。だから席についてパイを口に入れたつてわけ。

「はい、美味しいです」

「そう良かった。では、私もいただくでしょうか」

お客様はそう言うと、自分もパイを口に入れる。

その甘い笑みに、整つた顔立ちに、嫌味にならない立ち居振る舞い。このお客様、相当女性にモテると見た。新手のナンパかしら？

そんな考えが一瞬、頭を過ぎつた。それならそんな甘い手に引つかかるわけにはいかない。

多少の警戒心を出しながらも、私は向かいに座つたままパイを頬張る。

甘いのはパイだけで十分だ！

お客様との出会いから七日が過ぎた。

あれから毎日、昼過ぎにやってくるお客様のデザートに付き合わされている。私の胃袋は完全に